牛店雜談

安愚樂鍋

一名奴論建

初編

一名恒春文著

牛店雜談　安愚樂鄉初編

一名　奴論述

A751
1
48-3789

牛庵雜談　安愚樂鍋初編自序

世界各國の諺に。佛蘭西の着倒れ。英吉利は食だをれと。食臺ハ並べ〳〵譜ど。衣ハ肌と覆ふの器。食ハ命と繋ぐの鎖。心は猿の意馬止て。咲いて櫻の花より團子。色則是食色気より。餐氣を前の佳味肉食。牛に花ゑまして膳好方便。佛徒家乃五戒さらんべア。虚と實の内外と西洋風味を索混て。世ふ克熟〳〵甘口と。作者ゞ例の自己味噌。家言もあ〳〵不果放行。彼小便の十八町。慢〳〵地急案即席調理。刻葱の五分ほどを透ぬ測量のタレ按排。生肉の替りハ後輯すて。

一快端を採ぬへと。文明開化開店の告
條めこの〳〵演述にまん

明治四歳辛未乃卯月初の五日

東京本石街萬笈閣の隠居ふ於て

牛の煉藥黒牡丹の製主

假名垣魯文題

牛乳 ミルク
乾酪 チース
乳油 バタ
乳の粉 パヲダル
御藏前 元祖

日の出

牛の氷湖道人 黒牛 賣弘

育竹孫

世をてらしと
うまれいでくる
うれやうれ
いく業なる
ひかり
あひたく

標目從初編至弐編

○西洋好の聽取　○高個の胸會計
○煙落個の廓話　○藪醫の不養生
○鄙武士の獨盃　○文盲の無茶論
○野幇間の謟言　○半可の浮世談
○諸工人の俠言　○人車の引力言
○生文人の會談　○話家の樂屋落

是ハ洩まくるい嗣編に著ぶべ〳〵

牛店雜談安愚樂鍋初編全

一名　奴論建

東京市隱　假名垣魯文戲著
開　場

天地ハ萬物の父母。人ハ萬物の靈。故ゆゑに五穀草木鳥獸魚肉。是ゴの食ふもの。自然の理ゆゑ。これを食ふこと人の性なり。昔くの里諺ゆ。盲文爺のたぬき汁。因果應報。穢を淨むる。かもく山の切火打。てう〳〵玉うきぶくり吸物で。味を忘めるの喰初ゆ。そろく開化〳〵西洋料理。

その功能も深見草。牡丹紅葉の季をきらいぞ。猪より
さらに〳〵だらく歩行より遅くこれも怠らん。往来絶ざる
浅草通行。御藏前ハ定舗の。名も高籏の牛肉
鍋。十人寄れば十種の注文昨晩もてる家味噌を
拳。わるきをきてのせる朝帰り。生のかりは粋いつり
連中。西洋書生漢学者流。劉訓ハ似さ儒者あ
れば省柏めのそ僧もあり。士農工商老若男女賢
愚貧福物〳〵をへて。牛鍋食い給ば開化不進奴と

鳥なの江郷の蝙蝠傘。鳶合羽の翅をもゆ物をて
遠からん者い人力車。近くい銭湯帰。藥喰牛乳乾
酪（洋名チース）乳油（洋名バタ）牛陽ものこゝに勇潔。彼肉陣の兵
狼と。土産に買ふも最多き。人の出入の賑い〳〵く込
合の節。前後御用捨。御懐中物御用心。銚子のおゝ
お會計。お帰シ。おさの入ラッ。実ハ流行い盛夜を
捨ぞ繁昌斯の如くにあんさまば牛いらしつまの
同気めとゝる肉食群集席を區別〳〵ありさぞ。

一個〻〻に穿て云々

とんきりのでもあらうか

○西洋好の聽取

▲年ごろい三十四五の男いろあさぐろくれどシャボンとあさゆつふとさえくあく
ぬけていろつやよくもるいるでつけうそうもろみでもきるとろろ百日ろのこさやや
しもるを右のうえあでつけのうとも ヲーテコロリといくる香水をつうふとええく
かをのけのつやよくとびいかくべつあもれうふずきぬとろのをもあにありみ
ろう糸二タ子のうさられ者ぶいさふさのトタ云らふふもうえしのかくうう
ゐるべ〜カナキンでもうこるうりりがさとうろうふへあとうしいさんぐん
みでのとあうう袖時計のやすのものとえうふもづしてええくぐときとえる
いろうものけまついろうのものくえもうみまりでしらういきんのうんふふと
ええうう。とうりみいとええと
ゐるきくみもいをもろけゐる「モシ」あるこ上牛いを極る味でどを
子や山肉がひふけもあアぞうんや紅茶いうこやせんとんな

清潔なものをゐぜいるまで喰いるかつうめでごッせう
西洋でハ千六百二三十年前うう牛ぐう喰ふやうにあう
やしふぶそのまくハ牛や羊いその國の主ゥ金權と
云ッて家老のやうな人ぐるけまアア羊人のハ一ら
這入やせんのサ這く我國ル文明開化と号ッてひう
けてきやしふうう我くまでが喰ふやうにあうこのハ実ふ
ありがこいうけでごス それを未ざふ腱雲の弊習と云ッ
て子ひふけねへ奴等が肉食をさうやア神佛へ

手ゞ合されねへのヤレ稼ぎるのとろろねへ殿様と
いふのハ実理学を無へねへうのことぐばス持んな
夷ハ福源の著と肉食の現でも漢せてへ子モシ
西洋ハやアそんなとハごゥせん この人ごぎりませんとごゥ
なとふ 彼ハいきべて理でおんて物ぐぐろふ蘭学
の私や車のおろけうんざアおそをいつとうんざ子酸ハ
ごらうトろ偽伝機の針の先で新軍紙の細抜を
影ろ風私で寄ろふ風をもてる立風い物ざア

どうせんうあれハ子モシ物ハふ稼でごぜへ人地球乃
図の中に陵帯と出くありやす 国ゞあるゞ子彼
所ゞ赤道といッく日の照りの近イ地ごろふ
あつハことハたなうねへそを仮テ国の人ゞ日に出
ハ皆なろうん切サそをごろふそ国の主ゞいろく
工風をして風私といふものを造ッて大きな赤い袋の
中へ風をそろ詰ませく寄ろふあろ出とそのふろ乃
口をひらいやすと。出ると大きなふろへ一ぱいに出せて

きこ風ごのふ四ちう八方へひろぐのっく生の肉が
ぎ〜〜くるとゆふ立風でごゝまぐ赤姫みこ雲ぐ
ありやす鼻西亜ゑんぞとゆふ極楽いゑ一ゆくと
ゑ中ハ白海藻でゝ雲が陽っこう氷が張のぐ
往来がでゝやせんそこで彼蒸籠車といふものを
ゆふ風寒〜〜ぶ感んゑりのサ子一体蒸籠車と云
りのい地獄の火の車ふ鉄出〜〜ぶさうだが
大鞴ぐるゑへのせく車の下へ火筒をつけてその

ゑうで石巖をぞんく梵うらくの上ふ書てゐる
大勢い家を家を見とく遠屋の通りがで紀や
せうナント考てるめサ子。何サとの人見人ゑ工風い彼古
の使いちあぶく巣でげスゑ山大ゑ世界の形象せく
渾沌とうして穂の如しと考てるいサ。その汉芳い羅迦
如来が須弥山と号けさとろが西洋人いきんく
たる海上を渡りて世界の果ううきてまでを考き
いあるものだのう羅迦仏法悔ちさうサそとぐ

汉て海をゑるる工風を西洋者ア後悔術といひ
やすハナヨヤモウ市場踏ろハイさせうゑうヨイくわく
さん生で一合。葱も一処ふためむく

○壁落個の廓話

◆年ハ二十四五いろ色ちろくあくあのくくくくさんふそいそろふぬひ生色ろの
四そろきぶひあ〜のあのくそぐんの小そで一ワ学ろ学いさぐあ女のあと
あ色しろとありい是二三日ぬつけでぐんやりしくふ生ちどやき
るそちありぎんぐきり十六ちんめさをこい是者ろのあやしくふ生ちどやき
ぢくちんぐろのきるねつけいぐろげのうぶぶとふそこ見も仕い是うのくこ
うときぐうでをきろりてうでまりのぎんうき奥をひろら色いれとふうう
さーいあさくつのこうけ目のふをと「本ちんゆめぐの世界ハかいぶい
もくくしてきいろいこをとうをとと」

ぎつふふさいごヨ彼物こゝこゝ三ヒらび出物ことのあるのこゝらけんのんごといふのに外はがむやそふあぶらうといふうゝあめくゝ一件の処へ猶是して表ゑしあいふ一人ゑゝ〳〵あゞるのも表ゑくねゝゝ腔面でゞあゞりこんごこゝがあひふくと二舎まゞりこさ拙女ゞあいふふ出ッこゝせこらう表ア表ねゝこゝつふ不足織ごとあゝこゝこれどひたつけのこたごゑうあこくこゝたを向いたぬこゝうお茶屋ゞ舎ときし

てへイあめ〳〵くゝトたゑく切あげたのぐその物ゝきりぬけこゞ表彩めゞあつふの新そこあゞくてぬ男ゞがつて。ひけて雑〳〵たくゝ逆入とたぐふモシエねたやアこくきこゑほしこ人ゞゝゑゑゞざんもヨこさサお茶屋の人とのきゑく表んゝ紅の月のこ日ふ田町の奉矢年雑こゝこ人一雑こぐ二舎ふ来ゑゑしこお客ゞゑもヨト歌ふこゑをこゝけふれこゝふしろをこゝ世ゑのゝ外ゞゞゞゑゞゝとゝあゝこゝゞ副深舎散紙ふゑア代られ

ねへこと是をきくがいなや小僧ふらつて。その跡より足
ふきゝどをトンく。さてはめのトをづうと表を
うけて茶屋の女を。おれざうまいねんさつサとどぎれ
やといふ家で花出して茶屋まで来るく帰りる
ところが女中が気うう追ッうけく来てなふうあれに
さいつことでもどざいまゝうかい。コウ。いくぢやねへ
ろ。ダガノあのふの男うふ年びやく年中吉原へ行り
たいりとんでぬちやうれうがるくるつくされが

ことごとくてねまみちねへうら湯ぞうへでる業をへ
やうと為ッてゐるめサあんざッても九三年といふ
めの一下ぞんしかつしことがあるめへ忘やアねへこの
そをとごてのふ宝樋橋のことびめ「ううあんしあんし」
ふ鶏泉の「こさをさくゐる」「ゑしきつてゐる」年泉
忘やア客を古風ふかねしといひサ「あんざゐす」「ぞをッて」
といふことうう松田屋のつのゑことを。南ゑびのちや
ととふ宴会の「うふ」「ゆくい」金瓶大黒忘やア

「あやぞを」といふことびと禁じらをこを尾表の紛乃
むうひのちゆいめヤ大文字屋の字ちかるいの。伊勢六の
大元滅の内やうまでを知ッて居るこ。岩田屋のあい
らんこちい傾城水滸伝の絵年ぞ甲子屋の表造
流ぞ客のくるうとねへうを業屋ふ忘をあすとゐぞ
忘ふうちちちやア乗屋ぞひんごろしで客ふあつても
あるしこうはあそびいびえねへうぞうと世界をえん
やぶつて彩造買ふ忘てひんぞ沢めるあそびいがう

世い家ぢやめとまるとうめざ〜いねの仕事サふあん
まり老人ばかるうふそれも癖〜て藝者と出ろけ
たが組ろぐ八十ぬいつぐらねへうふ茶屋だいりの汲結
もらうぎだろうグット気乱と去ッて幇間と買ッて
あそんでもえろぐ彼奴ら いざうも友と咽でおうねヨ
いまあひぐも新参とさそッて金子〜夕飯と喰ひふ奢と
あとうふ茶代奢ふ正参序作奢八ぶんぞといふ
流行ッてがぐろくとあ〜こんで来てかけぐへのねへ

丈構幣とそろく一枚こすらせこそモウく
吉原ろいこぶんく。ちこ今夜い廓の名殘ふ彼一件
の処へ出ろけるつりぐぶ。めうひとぢん附合べーサ
ふふ又様ダ。イヤサ実ふこんやで根ッきり茶ッ切り
ろんそうふこれぎろく抜おてこしもあろうダ

○鄙武士の獨盃

▲こーごろいろ三十ぢろいろあくまでこうろくあるねい前びんめくさこぶひのつこも
そうぶこの火のつこそうあこぶきぶこうろのめんのめんつここんつくねの
子ふふこうろのこれこさろくこるたろるこうろのくここ成
いこぶろあるひいろいこのれつきとかくさんこめうこちろのめんふんぐろくこまき

つけつんいるてんのきめとうでまるくしてあやゆくあくまるどぎまるし
とえくくろうもくのさえふえれのつきくるとこうんつくくまいかくしくらちち
ゑすごゑまそ 詩 「夜い斬ふいくろイそでハア腕ふいくるウ
腰間秋水。鉄を断べーイ。人鯛をべ人と斬。るる
きべるときるウ。十八交ともぎぶ縫児の社ア引。
是ヤく 女子酒エめてこずろイ。こやくそーてナ
生の和味のとりゑ一四くれンカ。ア愉快おやく
きまるくこゑやしてとりふねるさむをハア失敬ごめんコヤ女子
ろくりをりくびしるひぎとこてきれ
ゑふと周術きてとるろ勉強して神速ふせの
とちくのさむくひ
ふくちむくひ 若牛肉いを極法好抱とまねさろのウ仕
るぶ僕ゑども殊実賞味いくきぐござるイヤかくる
物價沸騰の同勢ふ及レで割烹店ゑどくまくうこを
ゑんちく義い所謂激發の徒でござるは牛肉チウ抱ハ
ゑる味極まるのをゑふぎ周化濃苦の食料でござる
テ。イヤ何くとまくくて失敬。法めんコヤく女子一寸
来レくコヤ。あのウナ生肉をナ一行ぎろり結集いく
きンで。到極の正味を周旋いくをイて敬可

唐人の寝言に
管を巻羽織
伊達ゝ
珍芸
漢語
往来

魁園
梅賀賛

きハまッとき生肉ゝ名くいく舎針いさんぞう
ぎく揄快きハまる陸奥の酒名ん中ハまちゝ雉
英ゆ年引ト[illegible]女子はる
るゞトゝろの木なのちゝのウタ「ゝ紅ゝゝ白のそ色ととろと
人ゝゝゞアゝゝあさひハイ白ハふウ山さゝゝ花アゝゝ引

○野幇間の謡諛

▲能どろハ三千三ゝろゝゝろそゞぐく世のひとゝとゝとゝとあるゞんのあゆちゝ
花ろゝくちひゞく五ッとゝろゝんをつけ上きゝ世のひとゝとゝとゝとあるゞんのあゆちゝ
ちめまゞひさんゞ花のそゞめをつそるゝろぎんの一ッさげねつけい甫ゆそゝちく

とういろうる古風なさいくきせるハ石かハたりのてんぐ
ぐまつげとあげさげ多くくちもとつぶあて物と云事有○いれいうるてこくいの
きくとおがしく
あきらきの地内あくうでゆ紙屋
とり上きくさくそるれぬやうす「モシ」若旦那ごうでげスとの世ろい
でぐぶ柳橋辺であうろれ是ぢ者やアごぜへせんろエモシ
あるうまくろいせ是ぢると花ふりやすぜ柳のちぢを
雑でごぜスちく者ろくヨット忘きろく二三日めへに
湯茶の晩花ろう花れ是ぢ来きるへちろへ愛に宵る
の人形筆ツト云ちろのたとしるるエモシあの媚姿いあるこ
ふアつとめをきるれこ仕ちちでげスぜイエサ油とうるる

るんぞとしのいひとろろりのお客でげスあること
拙がその中いきのあやろのめこと者やまいッ一アおきる
せへ〜山百内塗のよ伝さん（晩花楼主人の別名とぞろつの一対海家百ろ）
の傳云をあるをやしろろ一寸新を出〜さつ人でに
揚上一条ることろが私をるとおいらんが壮図八
さん深さんと同体久へと次の間一ケげ〜てきるもッ
たろう私がいちぞんぞ多をくろうせくへイ深さんいる
さあや（清元景春の名引多栄やう）へ者てあつぐるさるろう出くふ拙

かつらもしらんれ愉快。えぞお餐意さいと
十八番の狩をきあるとアまつてうんるヨとるふろ
そんく志ぐら新造者うふ耳ときりサ私い尾
車さんや連山さんのそろをまろうさくるうち
ふ金花樹の味ふろ。るれの「ひろる」ぶ一ぞん
とあるふ見ゝさっそろであやアくとは弛老てう
ぞいの冒がおのそ西洋同行一字三ミニウトぞろの
ひるぐらふ媚妓の四。のづハさんうれさんいぎしる

山水京情の　ね狐半
白にようそ
悪玉丸
雑兵と悪徒
宮ゝ二賞
野ちて
養ゝう
附おまゝ
そのを

ましからあんまりひ白がござるめぐヨといふ迄て
ハツと掬ふから露那ぬらちころわらきろあげ揚貝
ちよんくまくちよッらふ松がかむらひふゆれますさの
づちたぼ日の一席下さんびも羽とゆしてスタく
ふげてきるさのサッサッモシこんどふあるさこでもかしこで
ねへとゑいつ里田アどんなめにあふろおとやせんヨアく
あんまりおもッて咽がひつくやうになりやしさいゑ
いゑふちやつんで一揃いできき女郎衆いもの女郎衆

チト附代がヨットく どぜへもく とふことのんびあるまさふきあゝめい
ともあやくちーとおちかし ろだんなくちよつとどらんでせへやしさる
里の年寄ハサちよつとおくねげさ風儀が牛どべ
平字器なで食る達者サいありやアたくさんの
おやアござへせんぜ。そんでも小里のお茶屋の妻
君ろさらあけ里田ア山谷堀あたりの船宿の女
身り若さん婿おやア足うけねへろがござらあ
かふねへヨットありと云やア牒玉の処一絃縦冊

と客さ紀うらたのまを　やーうう今戸の　
風雅の注文ぐ一時　ちうらうよりやーう
外と墓の有物　わが二夕組　そど通りやす。
やとんまぶ　墓そうんモシ　そを一件の子。
らいうう大七かうそうけて　演中やへ遠出ーう　義サ。
ホンニ　おめへさんそど　死ぬりなうまのうるいお対い
ぜへませんぜ　彼奴　私と　ぞるとと　撃ての　義者を
ういぐ　義だんあんぐうう　あさいまーう　あまぐう

ぞやあんまりぜスうぐモウ一ぺん　活生でどぎの
すョとあうりとちかうう　ぐくあとあしてうう　ま
子モシのあうんぐうふ　縊を出して　婦人をおうしうき
るのぐだス　実ふぢぎぬめぐぜへ　ぞ。ア　おそまぐく

○諸工人の　俠言

▲ぞーぐうふ四十ぐうぬ　大工う　死皮ぐうぐ　高しぞんぐ　ひき
そううみ三尺　あびいよぐまうれど　白木のそうぞんぐめ　あぐぢ　きうしの
ちぞぞいれふあうぞうの　きんちうぎ　るかぞふ　ぞのとぐうぞうぐれ　ぬ
きうくふんあぐうとの　ぞんうふぢ　きうぞうのひとふ　あふぐーふぐあうんうとふ　ぬ
ちうぞうと　ぐうくのわど　あひうまうり　とうぞうぞ　ぐうぐ
まぞぞ　ぞうのううど　ぞあぞぬうう　とうるうぞ　せあり

「弓」コウ　松やきいてうれ

あの勘ぢの肴弟子など附合のねくまねけい酒来の
祥四三界ふ四方からあるめくと物のこせまりからふ
うぞきのてうや多辺仕りの上で八右衛つさんの処へ
へうらり出さとてうど抹梁がきてあく酒がはいまッ
てゐるぞらうまめくの弟ぞれどあらぞろて世話やた
だろう犬のうそぞてういまてるからぞてうふ酒をいたち
けち四方ゆげられ祐へぞらうまうぞうぞれくからつッぞう
うんで一杯ゆつけぞまんぞ さうぞ抹梁で名くでも

ごもくをうふたをうをッちゃア外はぐるまとねへこうら
さうぶたをうけてあるのをヨ小俠をこれはゆくありてあるへ
花出〳〵て横町の魚政の廻一往てきそでのさうことを
きづきをかとあつふくこんで肉四一文〳〵けて一升とおどろ
こへあらア志らんこれの半をこへぐ始へッて与とゐもな
く湯と骨ぶきを廻〳〵抹梁もらうれ出〳〵て新宅の
小笑代をゑんでこいろをゑんこうい〳〵ろ〳〵ゐぶねへ
藝妓が一枚こびこむと八右衛つが〳〵らまで深家

ふるう〳〵がるうだすとノ勘次のやらうがいぶ人の
ふう〳〵のを志ゑアぶつて二上りだとう湯あがりごとう蛸
坊ぶ湯をにあがつをゆうるつらア志ゑアぶつて猫の
こへぶくぶくさんざッぷぶさうぶたう志ゑアがつく
そのあげ句が人力車で小塚系一かゝぶそうと成と
かんぴの志をッこれへくあをさうだぶるこゝをきあと
めんぶうう猫梁も八さんもそをゐるのふるうて志ゑッ
たがそコウあも志ゑうもねへ細工びんぶう人ぶうだ

あのやらうの男ふ袴合をきてこうやかつく伸び侍
合をとりづゝ右ちうたをこうなら管ゐう職人をさゝべ
やあて人力の車力ふでゝゐ男がれべつひとをつけ
こちとらアロ十づらアさげて色家もそッけもねく
ゐれど附合とこうやアゐるゞ秋中男がふらうこも
宮天ちまくうぶあめうゝのだうたんぼまでもゐく
つゝうゞアあいつゝとい職人のたてぶちぶつたたづッ
てへいひぶんぐうちゆアア七十ふゐるだうにかうと

強児でゝ上七人ぐらしでき升の米八一日ねんく
夜ぶあけてかゝもぶがアと嘶きやアニ分のれぶゐけ
ゐやアひんぐうゐるもできねくかゝぐぐ年中十の
字の昆と右へひん曲るぶゆ商美ぐたれど南茶米
とかての飯い喰ッることぶねく男ぐあいつゝの男に
かうアふ人仕ゐやとさもやアがうてうゐい仕ゐうう
喰ッてゐると垂木へ出ゝく男ふ丸ちてあいと茶丸
ゐんぞヲゐゝべて賣ゐやアがるのぐアもッぷんにか用

さる下話ふ中に味噌ゐどちがふおもしろくゆんさるなだ
ぐずく考へがりあるものうてんとそこに紅毛の
立養ふられてやらあちでかりるぐらゐんのころぐ矣
でも鉄砲でもうつてこいあそまるの考へねくらくト
いひがつまりいひくるるるらうのウ松てあくよ去
たそこがさうまあねくうヲイくあとねくゆくして
モウ二合そーて生肉もうりぐらあちあくまろウヲ

○生文人の會談

▲ちろどろあちろかろの出画舎れん中に三十二ぐらゐ
さのそころろえあいあらねど世とそあぬぐろこつりゆてきめのの上下ふそろひ
ゐろとりくちもゐくき色ろろのそありゐくさそのふとひもそむるぐろふむまびて
ろんまきいとるむぐーらとろりふくろくろふくろ紙のまきこると扇面のろ
ねるとあゐうざらさのふひきふくこうけにあそトタ北ようりどさけのゑいの
あるいゐろゐやら万八あろうの舎ろまこそえつれいさそひとつ見ゆ紙るくぐ
の人由とこそえくろのうとも
ちろくこみとろへあうとまろべー

一ろふの舎いまろろくあのやうふ
唐紙扇面の攻名具でろうまろれていさすぐの僕ら
がつろざこれざろう近ぐいぐのやうふまねうれても紹義
むろのうこせて書画舎一ろ虹ぬとくきあぐろふい南溟
老人が老寿の遊といひ殊ふ南溟翁の三十三回の遠

一方沈は蒲を　一尾

ごてのうをなぐら　文くら

蚊の喝

こゑの

きんぐ

風流

一蕙齋　芳幾戯画

福者やのふ先生が出てぬらふあるれば松山松嶺芦洲

望江東寧恢雨柳園隨竜楼湖波山の結先生こゑが

不承知者やうせひふ出帝をねがふとうぐく扇めん

字の若宮と賀小路の一庭が供者ふ来るまで止を

不切出うけさところが若牧五牧がの一局へ合俵して

一杯のむが若やごうう先生おあとでねがひますと先

出うう扇面の絵ぶすあサさてうるさいとごとギョウと

者ぐうかひて船ごとごで芭蕉舎主への義理者と鈍急

あるく書画の注文を扇面が弐百疋唐紙が五百疋
と極札がついてある筒を一云の礼のこと先四五年くせ
らしてこと忘ひまきい僕がかふぐの居まりと雲霧のこ
とく永養くおなじで一本どうろ徳先生の合作でご
ざいますうち一寸おもしろいのヤレ遠国うらたの出来
こ書画帖ごのとちまち扇紙の山を色うい変うり
うるさいもの、切あげて貰ーゆうと身ぎんまくとて
ある。家中蒲の方で生辞ぐうん合を先じめて絡ぎで

人ぐが奏先生る居ふ不ふ〳〵来ると俗所ふ琴
が雅乙表ぐどいふ風流雅ぐ門食ときあてあるむふの個
ふい強物町の松本ぐ工作サ 根源先生ぐサ義会者の
寄ハと合ふふ大当名ひでこまうう船で上ふ〳〵むうけ
るうう芸源附合とこ百うせるのでなふ笑とあるとぐ
なうんそれい偶の附合ぐうう止と泊ぬぐ明日ハ大蔵の
和ドぐ公ううきまとく お席ふ放で結地三幅対の山水と
蒲席ふ表でめンうれぐなうんうチトつれあいそぐも

者ゞ後日こゝて尝公のそでをひいてねまの出しだゞ
ゑゆゝ呑こゝん世ゝ者ゝ水ゝよゝく牛庵ときめこゝ中村
のかゐひゝ沢こゝろより蔵ついてのめるゝゝぬぐてナ
掬ゞ美水氏の義理ゝ先んぶゞ三まこ来月の邪
月ゝ第八で虚堂の展覧会二日ガカウト寺湯の拝
蹲ゞで席画の約迷てくるさいく実ゝ宮名家
ゑゝ彼ゞ〜こモウく名字ゝ癖先ゞしくヲツレ
こゝゝとゝるく

010190522801